

人と情報、地域をつなぐ図書館

— 図書館との連携で広がる観光まちづくりの可能性 —

4

公益財団法人日本交通公社 観光文化情報センター 企画室長・主任研究員

福永 香織

はじめに

ここ数年、「本」や「図書館」を取り巻く環境は大きく変わってきている。2012年（平成24年）に民間による指定管理者制度を導入した「武雄市図書館」はさまざまな議論を呼び話題となっているが、それ以前から、これまでの枠組みにとられないユニークな取り組みを行っている図書館が全国に存在している。その動きは雑誌の特集や書籍のみならず、キュレーションメディアなどでも取り上げられるほどである。一方で、地域の観光政策や観光地づくりの観点からは、連携先として図書館が挙がることはほとんどなかった。しかし、近年の図書館の取り組みは立ち寄り先としてだけでなく政

策面においても観光と親和性の高いものが多い。そこで、本特集では、図書館をとりまく近年の動きを概観しつつ、2つの事例を取りあげ、図書館との連携で広がる観光まちづくりの可能性を探ってみよう。

図書館と観光との連携に関する先行研究と議論

先行研究としてそれほど多くないが、松本¹⁾が「観光と図書館の融合」において、図書館や観光を取り巻く環境の変化や特性を踏まえて、両者の親和性の高さを指摘し、図書館のサービスを①集客効果が強い項目（コレクション・文庫、イベント・行事、設計やデザインの効果、図書館への視察・見学、図書館とツ

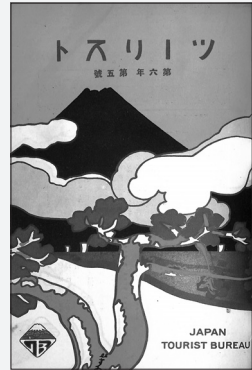
アー）と②補助効果が強い項目（地域資料、地域テーマに沿った蔵書、レファレンスサービス、デジタルアーカイブスによる情報提供、情報発信の多様化）に分けて観光との融合について整理を行っている。

近年では2010年（平成22年）7月に草津温泉で図書館問題研究会の全国大会が開かれ、「まちづくり・観光・図書館」がテーマとして取り上げられた他、（公社）日本図書館協会が発行する「図書館雑誌」（2012年8月）の特集テーマに「観光ポータルとしての図書館」が据えられ、小布施町立図書館まちとしよテラソや奈良県立図書館情報館などの事例が紹介されている。また、当財団の機関誌「観光文化」203号（2010年9月）におい

ても、視点「観光地における図書館の役割—観光客にも利用され、観光地の持続的発展に寄与する図書館とは—」において、草津町立図書館の事例を紹介しながら、住民のための図書館に加え、観光地の図書館の役割として「I住民と観光をつなぐための図書館」「II観光客のための図書館」「IIIリピーターや連泊客・長期滞在の来訪者のための図書館」という切り口で整理を行っている。

図書館を取り巻く課題と観光行政からのアプローチ

近年、図書館を取り巻く課題として挙げられているのが、活字離れやインターネットの普及などによる利用者像の変化や、予算の削減、評



「ツリースト」第六年第五号 表紙
「旅の図書館」所蔵

旅行者のための図書館の必要性については、ジャパン・ツリースト・ビューローの雑誌「ツリースト」(第六年第五号)の「旅行と読書」において、東京帝国大学図書館長の和田萬吉が「旅客の為に図書館」と題し、詳細に言及している。ここではその一部を要約して紹介したい。

- ・遊覧地、鉄道、汽船、ホテルなどで小規模な図書館をもうけることは緊切であり、特に避暑地など旅行者が長期滞在する場所では、旅行者のみならずその地域の繁栄のためにも重要なことである。
- ・汽車、汽船は単に旅行者を送迎し、旅館は旅行者を宿泊させるだけでなく、その土地の有志と協力して小図書館の設置に着手すべきである。汽車や汽船内に図書スペースを設置している例はアメリカで多くみられる。アメリカは図書館業が最も発達している国である。
- ・図書館の管理・運営にあたっては片手間ではなく専任で従事する人を付けるべきである。
- ・蔵書の数としてはそれほど多くなくても良いが、きちんと選書したものを置くこと。備えるべき図書としては、その地域の歴史、地理、工芸、産業などの郷土資料が第一であり、次いで高尚な文学、美術書類などである。
- ・閲覧は無料にすべきである。貸出をする場合は一日は無料にして、それ以上の期間になる際は一定の料金を徴収することもよい。また、図書の汚染や破損に対しては相当の制裁を設けるべきである。

価値の確立(注2)などである。その一方で、これからの図書館の在り方検討協力者会議による「図書館の設置及び運営上の望ましい基準の見直しについて」(文部科学省2012年)では、これからの図書館サービスに求められる新たな視点として、地域の課題に対応した施策と結びつけた図書館サービスの実施や、課題解決支援機能の充実、他の図書館や関係機関との連携、紙媒体と電子媒体の組み合わせによるハイブリッド図書館の整備などが挙げられている。さらに、2014年(平成26年)には図書館の機能強化の参考に資するためテーマ別に事例を取りまとめた「図書館実践事例集」(人・まち・社会を育む情報拠点を目指して)が同省より発行された。図書館のサービスの対象としては第一に地元住民であるという前提があるものの、その取り組みの範囲が観光やまちづくりに及ぶことはそれほど珍しいことではなくなっている。

実際、全国の188館を対象とした「観光と図書館に関するアンケート」(注3)によると、「図書館は観光や観光客と様々な関連がある」とい

う意見に対し、「ある程度納得できる」が69.0%、「大いに納得できない」が19.3%、「あまり納得できない」が10.3%となっている。その地域が観光政策に力点を置いているかどうかによっても異なると考えられるが、図書館自体の観光に対する意識もそれほど低くはないことが分かる。具体的に観光とも親和性の高い図書館の取り組みを分類してみると図1のようなになる。見る、訪れる対象としてはもちろん、図書館という建物を超えて地域全体で活動している例や、図書館ならではの知の蓄積

観光・まちづくりに関連する特徴	図書館の例
立ち寄り先としての図書館	・建築としての魅力 ・空間快適性 ・利便性
情報提供拠点としての図書館	・観光情報の提供 ・書籍などの出版 ・相互観光支援展示
学ぶ・出会う・体験する場としての図書館	・イベント・企画の実施 ・多様な主体との連携 ・産業・ビジネス支援
地域をつなぐ中核としての図書館	・本をツールとしたまちづくり ・地域全体での取り組み

図1 観光・まちづくりに関連する図書館の要素

をうまく活用している例が見受けられる。

一方で、観光行政の立場から図書館をどうとらえているかということについて全体像は見えていない。この点はさらなる調査が必要であるが、少なくともこれまで筆者が関わった地域の観光基本計画などにおいては、各施策の連携先として図書館の名前が挙がることはなく、観光パンフレットなどに図書館が掲載されている例もほとんどなかった。

以下では、図1で整理をした図書館の中から特に注目した伊那市立高遠町図書館と奈良県立図書館情報館の例を紹介する。

伊那市立高遠町図書館

— 本の町・高遠を支える

— コーディネーターとして—

伊那市立高遠町図書館は1986年（昭和61年）に高遠町文化センターと一体となってオープンした（写真1）（注4）。伊那市のもう一つの公共図書館である伊那市立伊那図書館とともに、従来の図書館の枠を超



写真1 伊那市立高遠町図書館

えたユニークな取り組みを行っている。同図書館の諸田和幸氏に話を伺った。

高遠町は進徳館という藩校の存在や、古文書などの資料が多く現存していること、郷土史家が多いといった地域特性などもあり、以前から「本の町」として本を核としたまちづくりが行われている。その一つが今年で8年目を迎える「高遠ブックフェスティバル」（注5）である。期間中は街中の各所にブックスポットが設けられている他、古本市、高遠出身の作家にまつわるトークショー、本の読み聞かせなどのイベントが開



図2 2016年高遠ブックフェスティバル フライヤー

催される（図2）。既に地域で実施されている取り組みに加え、地元住民がやりたいことにチャレンジできる場として、内容や期間を変えながら毎年さまざまな試みが行われている。運営は市民や市外の有志などからなる実行委員会が中心となっており、その事務局を高遠町図書館が務めている。

2010年（平成22年）に始まった「高遠ぶらり」プロジェクト（高遠ぶらり制作委員会、高遠町図書館事務局）は、「伊那谷の屋根のない博物館の情報基盤の構築と実感ある知



図3 「高遠ぶらり」(アプリ) ©共同出版ART Creative

の獲得を楽しむ場づくり」を目指し、デジタル古地図「高遠ぶらり」(アプリ)（図3）の開発や関連グッズの開発・販売などを行っている。内部記録としての資料のデジタル化が目的ではなく、デジタルアーカイブ、デジタルコモンズ構築を念頭に置いている。住民はもとより興味を持った市外の関係者も一体となり活動しており、これまでに「高遠ぶらり」プロジェクトに参加した人数は600人ほどにも上る。「このまちってこんなに面白かったんだ」という声がかかるようになった他、当初の狙

いでもあった郷土資料の利用・理解促進につながったという。

アプリのメニューには「高遠ぶらり」「伊那谷ぶらり」「ジオパーク・エコパークぶらり」「内藤新宿ぶらり」の4つがあり、例えば高遠ぶらりの中には、高遠城下町絵図や町割図など13のマップ(注6)が掲載されている。マップの中の各スポットには現在の写真や関連資料、解説文がひもづけられており、それらは同プロジェクトに参加した住民や地元の高校生が、実際にまちあるきを行った上で作成したものである。GPSと連動していることに加え、観光マップも入っているため、土地勘がない観光客も使いやすい。さらには、「高遠ぶらり」を活用したウォークラリー「高遠ぶらり」「伊那まちぶらり」も開催している。公開から5年で36カ国、6万件的ダウンロードがあった。アプリを使った観光客からも好評で、口コミでその良さが伝わっている。

また、2015年(平成27年)からは「高遠ぶらり」のスピンアウトプログラムとして、参加者自身が既存資料やまちあるきから学んだ地元の情報を Wikipedia に掲載・発信していく「Wikipedia Town」の取り組みも開始している。

諸田氏は、「情報は食べることと同じくらい重要であり、情報を誰もが使えない、知る、楽しめる状態にすること、それをコーディネートするのが図書館の役割である」と語る。一般的に古文書の勉強会やまちあるきは自分たちで学び満足して終わることも多いが、高遠町では住民自身が発信者となり、得た情報を多くの人が楽しめるツールに作り上げている。さらに特筆すべきことは、取り組みの枠組みや範囲を既存の行政圏ではなく、伊那谷という大きな文化圏で捉えていることである。行政圏に縛られずに地域内外の多様な立場の人や組織が参画しているため、高遠町での取り組みが周辺市町村に派生している点も興味深い(注7)。

奈良県立図書館情報館

— 情報を再編集し、
ニーズを創り出す —

奈良県立図書館は奈良駅よ
りバスで15分ほどの場所にある(写

真2)。決してアクセスが良いと言える立地ではないが、平日の昼間にもかかわらず館内は多くの人で賑わっている。構想に10年をかけて2005年(平成17年)に開館した同館は、ほぼ毎日のようにイベントが開催されることでも知られており、カレンダーに開催されたイベントだけでなく、館内では医療、健康や法律関係などのコーナーや、いろいろなテーマを切り口にした図書展示なども随所で行われている。



写真2 奈良県立図書館情報館

「ニーズに応える図書館ではなく、ニーズを創り出す図書館にしたい」と話すのは同館総務企画課の乾聰一郎氏。これまで図書館に興味を持たなかった人にかに立ち寄ってもらえるかを意識している。コンサート、図書館を舞台とした演劇、寄席、マルシェ、ファッションショーなど、図書館で開催されるとは思えない内容に多くの来館者が集まる。もちろん、図書館の資料を利用してもらうため、イベントの開催時には当日配布するプログラムなどに必ず関連図書などのリストを付けている。



図4 ホテル日航奈良貸出文庫「都読」

2009年(平成21年)から2011年(平成23年)には「自分の仕事を考える3日間」として、仕

事や働き方をテーマにゲストの話のうちがいがら参加者同士が話し合える3日連続のフォーラムを開催し(注8)、全国から一日約350人の参加者が集まった。期間中はホテル日航奈良との連携による宿泊プランも販売し、図書館やホテル周辺の飲食店は多くの若者で賑わったという。また、千田稔館長の著作をはじめ、館所蔵の書籍からその時々の奈良のトピックの関連図書を選びリスト化し、その図書を宿泊客に貸し出すサービスも行っている(図4)。

さらには、文化発信のメディアというコンセプトを掲げている通り、館内のみならず、図書館外での出張講座や、奈良県内で開催される正倉院展や古事記編纂1300年、聖徳太子没後1400年などのイベントとの連携など、奈良県の文化振興にも寄与している。その他、映画、物語の切り口で奈良を紹介している『読み歩き奈良の本』の編集(奈良県立図書館創立100周年記念)や、地元企業との協働で作成している情報誌『ナラヨム』の発行などを行っている。公立図書館として初めて開催したビブリオバトルは70回

を超え、これまで参加した県内外の有志が企画・運営を行っている。

乾氏は、これからの図書館にとって大事なことは「情報の再編集」であると語る。イベントなどもその一環であり、図書館に蓄積される情報を独自の切り口で発信し、利用者にとって新たな魅力や面白さに気付いてもらうことを狙いとしている。これだけ多くのイベントや展示の企画には、館内の司書の協力はもちろんのこと、館外の多様な主体との連携が必要不可欠である。とにかく自らいろいろな人に会いに行き、つながりをつくっているという。

図書館のストックII地域の宝をどう活かすか

今回の調査を通じて、図書館の活動範囲の広さと地域性の豊かさ、バリエーションに衝撃を受けた。しかし、予算や人材が減らされている中で、高い理想を掲げ、司書の仕事の範囲を広げていくのは簡単なことではない。高遠や奈良の例のように、司書のみならず地域内外の多様な主体と一体になって取り組みを進める

こと、自分たちで取り組んだことがかたちになり、やりがいを肌で感じられるしくみがあることは重要なポイントである。

一方で、図書館としての取り組みを発信し、広めていく上では、地域内外に魅力を発信することが多い観光行政や観光関連団体との連携は効果的である。ヒアリングを通して共通だったのは、両図書館ともあって観光を意識しているわけではない、取り組みでいることがたまたま観光と親和性の高いものであったという点である。観光のみならず、多様なテーマを扱う図書館のストック(人・情報・資料)をいかに引き出せるかは周囲からのアプローチにもかかっている。観光という観点からの図書館の活用と連携については、さらなる研究が必要であるが、一度、それぞれの立場から地元の図書館の特徴や取り組みに目を向けてみてはどうだろうか。そして、「旅の図書館」としても全国の観光地や図書館と連携して取り組めることを模索していきたい。

(ふくなが かおり)

(注1) C.A.T.S.叢書第5号『観光と図書館の融合』松本秀人、北海道大学観光学高等研究センター、2010年。『観光実務ハンドブック』(日本観光協会編、2008、p.602)にある「観光施設が提供する役割には、目的役割と補助的役割がある」との説明を応用。

(注2) 松本氏は観光に関連した取り組みを行っている先進事例として鳥取県立図書館、高知県立図書館、草津町立図書館、奈良県立図書館情報館、千代田区立千代田図書館、津山市立図書館などを取り上げているが、観光学の観点からの分析が必要であると指摘している。入館者数や本の貸し出し件数のみならず、多様な取り組みをどのように評価するかが議論されている。第三者の間が評価する動きもあり、例えば、NPO法人 知的資源イニシアティブ(IRI)は、これからの図書館のあり方を示唆するような先進的な活動を行っている機関に対して「Library of the Year」を授与している。

(注3) 『観光と図書館の融合』p.109、p.121

(注4) 2006年に高遠町、伊那市長谷村が合併し、伊那市立高遠町図書館に改称

(注5) 2009年から開催。イギリスのヘイオンワイのように、日本にも「本の町」があればという北尾トロ氏、斉木博司氏の想いから始まった。

(注6) 2016年9月現在。定期的に更新を行っている。

(注7) 諏訪市でも老舗の酒蔵を会場に20店以上の書店やコーヒーショップが本店する「くらもと古本市 酒蔵の街の読み歩き」が開催されている。

(注8) 2011年まで毎年開催され、各回の概要をまとめた本も出版されている(西村佳哲著 with 奈良県立図書館情報館 弘文堂刊)。また、2015年には同フォーラムの番外編として「ひとの居場所をつくるひと」フォーラムを開催(同フォーラムの本も弘文堂より出版予定)。